



占いに使うため、将棋の駒のような形に加工した亀の甲羅。火であぶり、割れ方で「吉」と出た都道府県を米の産地を選んだ＝宮内庁提供



天皇の代替わりに伴う11月の皇室行事「大嘗祭」で神々に供える米を作る「斎田」が13日、栃木県と京都府に設けられることが決まった。その方法は、亀の甲羅を焼く「亀卜」という占い。だが、宮内庁は詳細を明かさず、実態はべールに包まれたままだ。

甲羅の割れ方見る

13日午前、皇居・宮中三殿の神殿前に設けられた「斎舎」に、古式装束に身を包んだ一団が入っていた。宮中祭祀を担う掌典職だ。すぐに幕が下ろされ、宮内庁幹部らも外で待った。和琴の音色と神楽歌を歌う声が聞こえ、40分ほどで終了したという。

斎舎の中で行われたのが「斎田点定の儀」だ。火きり具でおこした火に上溝榎の木をくべながら、竹箸で将棋の駒形に加工した甲羅をかざして焼く。熱せられた部分に水をかけ、割れ方で吉凶を判断したというのが宮内庁関係者の説明だ。だが、どんな割れ方をしている、2府県を選ぶ根拠となったのか。同庁の西村泰彦次長は会見で、「公にしていない」と語った。二つの地方に斎田を置き、それぞれ「悠紀」の地方(国)、「主基」の地方(国)と呼ぶのは古くからのならわしだ。ただ、占いの実態については諸説がある。昭和の大嘗祭に携わった川出清彦氏が書き残した「祭祀概説」によると、あらかじめ両地方の候補として三つずつ自治体を選び、その中から天皇がさらに二つずつを選び、亀卜を行うという。一方、平成の代替わりの際は、全ての都道府県が亀卜の対象になったように報道されている。

「秘事」祭祀の作法

祭祀に詳しい皇学館大学の櫻井

き ぼく 「亀卜」で占った大嘗祭の米産地

治男特別招聘教授(宗教社会学)は「どんな宗教儀式にも『秘事』は存在し、実際にはどのように選んだのか、同時代にはわからないが、それも祭祀の一つの作法。ただ、亀卜という占いで重要事を決める儀式が現代まで伝わっていること自体は、文化的にも歴史的にも興味深い」と話した。

宮内庁は多くの協力を得て準備を進めてきた。最初の懸案は、占いに使うアオウミガメの甲羅の確保だった。宮内庁は昨年、国内最大のアオウミガメの繁殖地として知られる東京都小笠原村に協力を依頼。村ではアオウミガメの保全や研究、漁が行われており、同庁は昨秋、8頭分の甲羅を購入し、東京都荒川区の亀甲職人森田孝雄さん(68)に加工を依頼した。

森田さんは江戸時代から続く亀甲品製造・卸店の6代目だ。甲羅を縦24センチ、横15センチ、厚さ約1・5センチに加工したものを計10枚作った。アオウミガメは甲羅が薄く、割れないように削ることが難しかったという。儀式の終了を知り、「ホッとした。うまく割れたならありがたい」と話した。

栃木と京都は歓迎

選ばれた両府県では歓迎の声が上がった。京都府の西脇隆俊知事は「農業者のみなさんとともに、秋には滞りなくお納めできるようしっかり取り組みたい」。栃木県の福田富一知事は「県民にとって大きな励みとなる」と述べた。那須南農業協同組合(JAなす南)幹部も会見し、那須烏山市内にある240平方メートルほどの水田を推薦する見通しだと明かしたが、担当農家については「防犯上、明かさなないように指示されている」とした。前回、田の所有者や斎田の詳細は、収穫の直前まで伏せられた。(長谷文、中田純子)

NEWS
ニュースQ³